

【連載：「私の好きなこの一曲」Vol.5】

You've got to be modernistic

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

このタイトルは、音楽ファンの方にも、たぶんあまりお馴染みはないと思う。それもそのはず、日本でもほとんど知られておらず、世界においても演奏されることの少ない 1920 年代に作曲されたストライドスタイルのピアノ曲もある。作曲者は、ストライドの生みの親、ストライドの父、とも言われる James P. Johnson。ストライドスタイルとは、正確に言うと、ハーレムストライドスタイル。20 世紀初頭にニューヨークのハーレム地区で黒人たちによって発明されたピアノソロのスタイルである。ストライドスタイルが生まれる前は、1900 年を境に一世を風靡した、初期のジャズスタイルであるラグタイムが主流であった。このラグタイムで有名な作曲家は、ニューオリンズで活動した Scott Joplin。ジャズの生誕地であるニューオリンズから、北に、東にとジャズが拡大し、ニューヨークハーレムで、ラグタイムからもっともっとドライブ感、グルーブ感を感じる激しいスタイルに発展したのだ。ハーレムストライドの系譜としては、James P. Johnson の弟子である Fats Waller、同時期に活躍した Willie “The Lion” Smith、そしてその影響を受けたのが、Art Tatum、Duke Ellington、Thelonious Monk、Count Basie、George Gershwin、Bud Powell などなど、後世まで様々なピアニストが影響を受けている。私はクラシックピアノを小さい頃から学んできたので、クラシック風に言えば、James P. Johnson はバッハみたいだと思う。

さて、私とストライドピアノとの出会いを語ろう。私は小さい頃から父親のかけるジャズレコードを聴いて独学でジャズを学んだ。レコードの中から聴こえるジャズジャイアントのピアノ演奏が私の師匠だった。大学に入って、お遊びでジャズを演奏し、歌ったりもしていたが、主に演奏していたのは、スタンダードやモダンスタイルのコピー、フュージョンの曲だった。会社に入って、私の上司がニューオリンズジャズの有名なドラマー（ニューオリンズラスカルズというアマチュアバンドであるが、ニューオリンズの名誉市民でもあり、世界的にも知られている）であったことがきっかけで、ジャズもちゃんとルーツから学ぶべきだ、というアドバイスを受けて、ラグタイムから学び直した。冒頭に書いた Scott Joplin のラグタイムは、しっかりと楽譜が残されていて、まるでクラシックの曲のようであり、どんどん吸収できた。ラグタイムの周辺におけるブギウギ、ブルース、バブルハウスなどももちろん弾きながら、2 年後くらいに、ラグタイムの次の変革とも呼ぶべきストライドに出会ったというわけだ。そして、そのとき、身震いがするほど、なんだこりや！と私に言わせた曲が、You've got to be modernistic。

弾いていて面白い、ドライブする、身体中の細胞が踊りだす、教会でゴスペルをシャウトする感じ、そういう感覚をストレートに経験した。J.P.Johnson の作曲した、Carolina Shout という曲などは、そのシャウト感覚のオンパレード。

ある時代が生みだす革新的なスタイルは、オリジナルがもつすさまじいパワーを持つ。だからこそ、その時代その時代の革新的なモノやコトは普遍的であり、色褪せない。そして、後世の多くの人々に影響をもたらす。またそこから、新しいものが生まれる。歴史はその繰り返しである。

このストライドスタイル、激しくて、演奏すると結構体力を使うものが多い。左手が鍵盤を大きくまたぎながら、強烈なリズムとビートを生み出し、楽器のベースとドラムの代わりをする。

そのうえで、右手はメロディ楽器のようなふるまい、あるときはトランペット、あるときはクラリネット、あるときはトロンボーン、というように、要は一人バンド、一人オーケストラにもなる。J.P.Johnson の作曲した大変美しい曲がある。タイトルを Jazz A Mine という。この曲をオーケストラバージョンで聴くと、どれほど美しくなるのだろう、と想像するだけで楽しい。私がストライドやラグタイムなどの曲を様々な音源から聴いて、それを弾こうと思っても、楽譜がない、楽譜が見つからない、ということがよくある。そんなときは、耳コピー。Modernistic も耳コピーで覚えて弾きました。また、音源そのものも、レコード会社がリリースしていないくて、米国の図書館や博物館に埋蔵している、というものもある。

このように、音楽の世界は、まだまだ未知なるものにあふれていて、深くて広い宇宙である。探索も楽しい。偶然の出会いも楽しい。

